早稲田大学大学院文学研究科紀要 第67輯（2022年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.67 (Mar.2022)

東山地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討

小　原　　淳

Ⅰ．はじめに

筆者は日本各地に残る日独交流関連の史跡・史実を地域別に提示し、日独関係史の再検討を行おうとしている(1)。本稿では、山梨県、長野県、岐阜県の７件の事例を取り上げる。

Ⅱ．東山地方に存する史跡・史実

（１）　独仏戦争に翻弄された甲州商人(2)

ドイツ帝国の創設、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の成立、フランス第三共和政の誕生、イタリア統一の進展、北欧各国のスカンディナヴィア主義からの路線転換、スペインの政治変化と結びついた三度のドイツ統一戦争は、ヨーロッパを再編する激変であった。しかしその歴史的意味はヨーロッパにとどまらない。休戦条約が締結された直後の1871年２月９日、ディズレーリ（Benjamin Disraeli 1804-81）はイングランド下院において以下のように演説している。「この戦争はドイツ革命であり、前世紀のフランス大革命以上の政治的事件なのです……そしてこの巨大な変化に最も苦しめられ、最も影響を被る国はイギリスなのです」(3)。意表を突くこの発言は、クリミア戦争後に締結されたパリ条約がフランスの敗北で無力化し、その結果、同条約の拘束から解放されたロシアが南下政策を再開してイギリス植民地を脅かすことへの危惧を語ったものであり、ディズレーリの懸念は、英露のグレートゲームの進行というかたちで現実化する。ディズレーリの言うように、「ドイツ革命」はグローバルな連関のなかで論じられるべき出来事であり、ここでは一人の甲州商人の浮沈を例に、独仏戦争が日本に及ぼした影響の一端にふれる。

甲州屋忠右衛門（1809-91）は、甲斐国八代郡東油川村（現在の笛吹市石和町東油川）で代々長百姓を務める豪農の家に生まれた。この地域は江戸時代から養蚕や綿作が盛んで、西陣織の材料として京都に運ばれる「登（のぼ）せ糸」の産地であった。1859年、前年に結ばれた安政五カ国条約に基づいて横浜が開港すると、50歳の忠右衛門は外国との取引に商機を求める。息子に家業を任せ、横浜の本町二丁目、越後屋のはす向かいに間口十五間の店を出した彼は、生糸、絹、木綿布、水晶、梨、柿、和紙、木炭といった甲州の産物を売るが、当初は資金繰りがうまくいかず、苦戦を強いられた。

しかし、ヨーロッパの絹工業を襲った一大変化により、忠右衛門の商売は上向きに転じる。19世紀前半に絹生産が躍進を遂げたフランスでは、絹製品が輸出総額の20％超を占めるまでになっていたが、1854年から蚕の伝染病が流行し、繭の生産量は1845～54年の１万8600トンから1855～64年の１万1900トンに、絹糸の生産量は同時期に2100トンから1500トンに低下した。この状況に対応すべくフランスは、病気に強く安価なアジア産の蚕の輸入に踏み出す。しかし一大産地である清朝中国は太平天国の乱の最中で、安定した供給源にはなりにくかった。そのため、開国して間もない日本の蚕に対する需要が急拡大し、蚕種の売値は毎年８割上昇するという異様な高騰をみせたのである。忠右衛門はこの蚕種ブームに飛びついた。郷里の息子たちと協力しつつ、積極的な産地買い付けを行い、上州、武州、相州にも買い付けの範囲を拡大する。勢いに乗った甲州屋は、一時は洋服店や砂糖販売、宿屋にまで商売を広げた。

甲州屋忠右衛門の没落もまた、ヨーロッパでの変化によってもたらされた。転機は、1870年７月に勃発した独仏戦争である。この戦争でフランスの政治・経済は混乱する。例えば絹工業の中心地リヨンでは急進派が９月４日に市庁舎を掌握して共和政の樹立を宣言し、さらにバクーニン（Mikhail Bakunin 1814-76）も加わって、暴力的な紛争が翌年４月まで続いた。こうした事態を受けてフランス商人は買い控えに走り、蚕種は供給過多となる。価格の急落を恐れる横浜の商人たちは売込量を1/3に削減しようとしたものの、産地から蚕種を出荷する地方商人たちはこれに同調しなかった。結局、1870年の輸出量は前年とほぼ変わらず、価格は半減した。開戦から一ヶ月後の８月半ば、横浜には数千人の蚕種商人が押し寄せ、緊迫した状況となった。なお同月15日には、市中の飲食店で独仏両軍の兵士の衝突も発生している。

しかし長期的にみれば、日本の蚕種輸出により大きな打撃をもたらしたのは、科学の進歩である。フランスでは1860年代から蚕病の調査が進められ、パスツール（Louis Pasteur 1822-95）がその任を負うこととなる。優れた細菌学者である反面、蚕については無知だったパスツールは昆虫学者ファーブル（Jean-Henri Fabre 1823-1915）に助言を仰ぎ、脳卒中で左半身不随になりつつも研究を継続した。1870年、パスツールは親の蛾に潜む微生物が卵に感染する「微粒子病」が伝染病の原因であることを突き止め、蚕病の克服に道を開いた。かくして1870年代半ばに伝染病が解消され、日本産の蚕種の需要は縮小に向かう。1874年の日本の蚕種輸出額は明治元年の1/5にまで落ち込み、自殺者が出る恐慌のなか、忠右衛門も横浜からの撤退を余儀なくされた。六十代の半ばで家土地まで失った忠右衛門だが、その後は鉱山開発や開拓事業に参入し、晩年には故郷で村長を務めた。

もっとも、1872年に富岡製糸場が設置されて本格的な器械製糸が始動したことに示されるように、甲州屋忠右衛門という一商人の没落と、日本の生糸業全体の趨勢は一致しない。当時は、世界各地で絹織物需要が大衆化しつつあり、高級品の生産から中級品の大量生産への移行、蚕種よりも生糸への需要の増大という傾向がグローバルに進行しつつあった。また、日本の最大の蚕種

輸出先はイタリアだったし、フランスからの輸入に頼っていたドイツの絹工業――絹製品はフランスの最大の対独輸出品であり、1857～61年には対独輸出総額の30.5％を占めていた――も1860年代から急成長を始めていた。こうした状況を察知して、販路を拡大したり、取り扱う商品の重心をずらしていれば、甲州屋の破産は避けられたかもしれない。ところが、価格の急騰に当て込んだ甲州屋の商法は粗製乱造による品質低下を招き、また本来の基盤である生産地との絆も次第に薄れていった。冒険的投機商から脱却できなかった甲州屋は、時流に乗って一時の強盛を築き、時流から外れて零落した。

しかし、甲州屋忠右衛門の後には何人もの成功者が続いている。やがて甲州財閥の中心人物となる若尾逸平（1821-1913）や雨宮敬次郎（1846-1911）は、横浜の甲州屋に地元の産物を運び、帰路は横浜の商品を持ち帰って甲州で売る「のこぎり商法」で身を立てた。山梨県の養蚕業界の頂点に立った若尾は、1872年に大小切騒動と呼ばれる一揆が起こって焼き打ちに遭ったのを機に新分野に進み、銀行業、鉄道業、電力業へと手を広げて成功した。また、1876年に洋行して現地の繊維業を視察したり、直接に蚕種の売込みを試みて、「僅か一年足らずの年月の間に斯うまで頭が違ひ、度胸が大きくなるものかと、自分で自分を感心」する体験を得た雨宮は[4]、帰国後に石油や鉄道、製鉄、水道、海運、製粉等に転じ、巨万の富を得た。独仏戦争に翻弄された経験は、近代日本の産業の礎の一部を成している。

（2） 捕囚となったワイン職人[5]

第一次世界大戦中に日本の捕虜となったドイツ兵に様々な人材がいたことは、習志野収容所を例にして既に論じた[6]。以下に、そのうちの一人で、甲州ワインの発展に尽力した技師ハム（Heinrich Hamm 1883-1954）を取り上げる。

日本一の生産・出荷量を誇る山梨のワイン製造は、1872年、甲府大翁院の僧侶山田宥教（1840-85）が商人詫間憲久（生没年不詳）を誘って境内でワインの仕込みを行ったのが始まりとされ、翌年には勝沼出身の生糸商小澤善平（1840-1904）が移住先のアメリカから帰国して技術を持ち込んだ。なおこの年には、甲府の商人野口正章（1849-1921）が山梨県産の大麦とドイツ産のホップを用いて、国産第一号の「三ツ鱗ビール」を製造している。

1877年、県令の藤村紫朗（1845-1909）が県立葡萄酒醸造所を設立、カリフォルニアの若松コロニーから帰国した大藤松五郎（1839-90）が指導にあたった[7]。同年、藤村や若尾逸平たちの出資で八代郡祝村（現在の勝沼町）に日本初の民間ワイン醸造所である大日本山梨葡萄酒会社が発足、これがメルシャンのルーツの一つである。しかし初期のワイン業は長続きせず、県立葡萄酒醸造所は1884年に、山梨葡萄酒会社は1886年に操業停止となった。

もっとも、当時は山梨のみならず日本、そしてヨーロッパにおいてもワイン業の受難の時代であった。その理由は、フィロキセラ（ブドウネアブラムシ）の流行にある。メスの成虫で１ミリ

程度のこの虫は1860年頃にアメリカ産の苗木に付着して南仏に持ち込まれ、1870年代にヨーロッパ各地に拡大し、ブドウ樹を枯死させた。フランスでは1878年だけで国内のブドウ栽培面積の1/4にあたる65万ヘクタールが失われ、生産量も1875年の8450万ヘクトリットルから1889年には2340万ヘクトリットルに減少した。フィロキセラは1882年に日本に流入し、官営の三田育種場や播州葡萄園に壊滅的な被害を与えた。世界的な虫害を克服するために、各国の農業関係者は薬品の散布、カエルや家禽を用いた駆除等の方法を試みたが、効果はあがらなかった。試行錯誤の結果、フィロキセラに耐性のあるアメリカ産の台木を接木するのが有効であることが確認されたのは世紀末になってからで、しかもこの解決策が日本に伝わり、防除の知識・技術が向上するまでには、さらに30年以上を要した。

ハムが山梨を訪れたのは、こうした時期であった。マインツ近郊のエルスハイム（現在のシュターデッケン＝エルスハイム）のワイン製造業者の家に生まれた彼は、青木周蔵（1844-1914）の依頼を受け、兄に代わって1912年に来日、1909年に開園した北巨摩郡の登美農園に赴任した。28歳のハムは、ドイツから持参した台木を用いて接木法を伝授してフィロキセラに対応するとともに、整枝方法も高温多湿な日本の気候に適した棚仕立てや垣根仕立てに変更するよう指導した。ハムの指導で虫害を乗り越えた登美農園は1936年に寿屋（現在のサントリー）の傘下となるが、今も「登美の丘ワイナリー」としてワイン製造を続けている。またフィロキセラは山梨県農事試験場の神沢恒夫（1889-1954）が1935年に防除研究を完成させ、全国に台木が配布されて、克服に至った。

日本ワインの成長に大きく貢献したハムだが、来日３年目の1914年に第一次世界大戦が勃発したことで境遇が一変する。戦争が始まるとハムは仕事を辞め、志願して青島の戦いに従軍した。11月に青島が陥落して捕虜となったハムは再び日本に戻され、しばらく浅草本願寺に収容された後、1915年９月７日に習志野俘虜収容所に移った。

1919年12月に解放されるまでの五年間、ハムは秘かに日記を書きためた。ともに収容されたカウル（Erich Kaul 1891-1941）の日記やクリューガー（Karl Krüger 1892-1980）の回想録と並んで、習志野での捕虜生活を語る重要な史料である。ハムは、収容所での待遇、食事、労働、衛生状況、日本人の将官や看守とのやり取り、収容所周辺の住民との交流、捕虜同士の喧嘩、登美農園からの度々のワインの差し入れ、体操や合唱、コンサート、勉強会、ギターの製作、あづまやの設営等の余暇活動、皇帝誕生日やクリスマス、正月、宗教改革400周年記念、出身地であるヘッセン大公国のエルンスト・ルートヴィヒ公即位25周年記念の祭り、そしてスペイン風邪の流行といった収容所内の様子を詳細に記録している。しかし、そうした記述の随所に混入している、戦況や国際情勢についての誤解や誤断も目を引く。その幾つかを拾い上げれば、例えば1915年４月20日の日記は、前々日に起きたイギリスのロイター卿（Herbert Reuter 1852-1915）の死亡事件について記しているが、その後に、ロシア軍最高司令官のニコライ大公（Nicholas Nikolaevich 1856-

1929）が射殺されたという誤情報が続いている。あるいは同年の７月から８月にかけての記述には、セルビアとオーストリアの休戦という事実誤認やドイツとロシアの戦闘終結が近づいているといった憶測が示されている。この手の思い違いは戦争の末期まで続いており、キール軍港での水兵反乱によりドイツで革命の火蓋が切られた直後の1918年11月６日には、バイエルンが皇帝位を狙っていると記されている。さらにハムは12月１日に仲間内で話し合い、講和の条件次第では帰国せずに、チリに行ってドイツ・コロニーを建設しようと決め、実際にチリの移民法を調べてさえいる。こうした事例は、収容所という空間のなかで、限られた情報源を頼りに、捕虜たちがどのような認識を創りあげていったのかを考える手がかりとなろう。

1919年12月25日、ハムは習志野収容所を出所し、27日に神戸に到着、翌日に喜福丸に乗船してドイツに帰国した。故郷のエルスハイムに戻ったハムはワイン業に復帰し、名誉市民の称号を与えられた。彼の功績を称えるために1997年にエルスハイムに建立された碑には、「日本におけるワイン製造のパイアニア」と刻まれている。

（３） 軽井沢の異邦人たち[8]

多くの外国人が訪れた第二次世界大戦以前の軽井沢は、規模の点では及ばないものの、東京や横浜、神戸、大阪、長崎、函館、あるいは香港や上海と同じく、国際的ネットワークの結節点の一つであった。とくに戦時中はドイツ人の割合が高く、外国人居住禁止区域とされた横浜山手地区等からの立ち退きが始まり、さらに1944年夏から都市部住民の疎開（東京大空襲以降は強制化）が始まると、軽井沢は河口湖や箱根とともに在京ドイツ人の主たる避難先となった。終戦前後の軽井沢には町の人口の１～２割に当たる2000人弱の外国人が暮らしており、そのうちの1/3ほどがドイツ人だったとされる。彼らは外交官、宣教師、商社員、ジャーナリスト、銀行員、学者、教師、芸術家、そしてオランダ領東インド（現在のインドネシア）から逃れてきた「蘭印婦女」等から構成されていた。なお日本全体では、終戦時におよそ3000人のドイツ人がいたと考えられる。

高川邦子や大堀聰の丹念な調査によると、戦中の軽井沢にはローゼンストック（Joseph Rosenstock 1895-1985）、グルリット（Manfred Gurlitt 1890-1972）、ハーリヒ＝シュナイダー（Eta Harich-Schneider 1894-1986）といった音楽家、画家ザイラー（Willy Seiler 1903-88）、松本高校の教師ヤンゼン（Helmut Jansen 生没年不詳）、同校教師や日独文化協会所長を務めて後にボン大学教授となったツァヘルト（Herbert Zachert 1908-79）、東大教師シンチンゲル（Robert Schinzinger 1898-1988）、松江高校教師カルシュ（Fritz Karsch 1893-1971）、戦後に大阪外大教授となったボーネル（Hermann Bohner 1884-1963）、慶應義塾大学教授となったヴィンクラー（Leopold Winkler 1889-1962）、南山大学初代学長となったパッヘ（Alois Pache 1903-69）、法学者シュテルンベルク（Theodor Sternberg 1878-1950）、平和主義者・文筆家のパーシェ（Hans

Paasche 1881-1920）の息子ヨーン（John Paashe 1911-94）とその妻で反ナチ活動家のマリア（Maria Paasche 1909-2000）らが、そしてドイツ人以外ではレオ・シロタ（Leo Sirota 1885-1965）と娘のベアテ（Beate Sirota Gordon 1923-2012）、タレントのロイ・ジェームス（Roy James 1929-82）、画家のブブノワ（Varvara Bubnova 1886-1983）、スタルヒン（Victor Starffin 1916-57）、スイス人料理人ヴァイル（Saly Weil 1897-1976）が暮らしていた。また、駐日大使のオット（Eugen Ott 1889-1977）が定期的に同地を訪問していたし、ハーリヒ＝シュナイダーと交際していたゾルゲ（Richard Sorge 1895-1944）も逮捕の二ヶ月前に滞在している。

軽井沢の異邦人たちは食糧や燃料の調達のために協力し合い、集会所や学校、教会、診療所を運営した。ドイツ人は食糧配給等の点で他国民よりも優遇され、逆にユダヤ人は冷遇されがちであった。また、ゲシュタポのスパイと思しき人物もいたし、祖国の状況をめぐって各国の出身者どうしが意見を違えることもあっただろうが、しかし、軽井沢の外国人コミュニティが内部でいがみ合って崩壊することはなかった。

無論、軽井沢には近衛文麿（1891-1945）、鳩山一郎（1883-1959）、坂本直道（1892-1972）、天羽英二（1887-1968）、東郷茂徳（1882-1950）、円地文子（1905-86）、日野原重明（1911-2017）、堀辰雄（1904-53）、室生犀星（1889-1962）、正宗白鳥（1879-1962）、清沢洌（1890-1945）、前田利為（1885-1942）、浅利慶太（1933-2018）、正田美智子（1934-）、篠沢秀夫（1933-2017）、西村伊作（1884-1963）の娘クワ（1927-）、緒方貞子（1927-2019）、精神科医の神谷美恵子（1914-79）、長岡外史（1858-1933）の孫で仏文学者の朝吹登水子（1917-2005）、ロシア文学者の湯浅芳子（1896-1990）等、多くの日本人も生活しており、三島由紀夫（1925-70）のような訪問者もいた。このうちの幾人かが異邦人との交流について書き残している。

戦禍を逃れた名だたる人士たちの疎開地での交際からは、華やかなページェントのごとき印象を受けるが、その舞台の一部を用意したのがハプスブルク帝国出身の建築家レーモンド（Antonin Raymond 1888-1976）で、例えばヴィンクラーの住んだ「夏の家」や、パッヘのいた聖パウロ教会が彼の作品である。レーモンドはモダニズム建築の旗手として知られるが、簡素で開放的、単純な木構造の「軽井沢式」も彼のスタイルの一つだった。

レーモンドはプラハに程近い都市クラドノに生まれた。学生時代に級友の間で日露戦争が話題になった際には、日本を擁護して、スラヴ主義を支持する友人たちの敵意を買ったこともあるという。1909年にプラハ工科大学を卒業したレーモンドは、翌年にアメリカへ移住する。1916年、ライト（Frank Lloyd Wright 1867-1959）の事務所タリアセンに入所、第一次世界大戦に従軍してスイスで諜報活動に従事した後、1919年、帝国ホテル新館の設計を担当していたライトに誘われて来日した。1921年にライトのもとを離れ、２年後に自身の事務所を開く。第二次世界大戦前は聖心女子学院、星薬科大学、東京女子大学、聖路加国際病院、ソヴィエト大使館、ライジングサン石油会社ビル、横浜元町のエリスマン邸、イタリア大使館日光別邸、藤沢カントリー倶楽部

クラブハウス等を手がけ、1933～35年に浅野別邸、小寺別邸、ウォーカー別邸、アンドリュース別邸（改装）、駒田別邸等、軽井沢に幾つもの作品を建てた。彼の事務所には前川國男（1905-86）や吉村順三（1908-97）、ジョージ・ナカシマ（George Katsutoshi Nakashima 1905-90）が所属し、レーモンドはさらに1926年にチェコスロヴァキアの名誉領事に就任し、離日する1937年までその任を務めた。第二次世界大戦が終結すると1948年に日本に戻り、多くの建築を手がけた。戦後の代表作にはリーダーズダイジェスト東京支社、MGM 社東京本社ビル、アメリカ大使館アパート、群馬音楽センター、南山大学神言神学院等があり、軽井沢にも鍋島別邸や「新スタジオ」、足立別邸を残している。

ボヘミアに生まれ育ち、フォイエルシュタイン（Bedřich Feuerstein 1892-1936）やスワガー（Jan Josef Švagr 1885-1969）、ラド（Ladislav L. Rado 1909-93）、ヴァイドリンガー（Paul Weidlinger 1914-99）といったチェコやハンガリーに出自をもつ同業者たちと協働したレーモンドには、ハプスブルク帝国の出身者という顔、そして日本建築界への貢献者という顔に加え、アメリカ合衆国の建築家という三番目の顔がある。第二次世界大戦前にアメリカに帰国していたレーモンドは、1942年に軍の要請を受け、ユタ州の砂漠にある陸軍のダグウェイ実験場に12棟24戸の木造長屋と路地から成る「日本村」、そしてドイツ家屋を再現した「ドイツ村」を建設した。1943年５～９月、同地で焼夷爆弾を用いた爆撃の実験が行われ、その成果は日独への空爆に利用されることとなった。このプロジェクトには、アインシュタイン塔の設計で知られるメンデルゾーン（Erich Mendelsohn 1887-1953）、ヴァクスマン（Konrad Wachsmann 1901-80）、クノル（Hans Knoll 1914-55）、ズッカー（Paul Zucker 1888-1971）といった亡命ドイツ人建築家たちも関与している。

戦後に再来日したレーモンドは、焼け野原の東京を見て涙したという。なお、故国に残ったレーモンドの父、二人の姉、三人の弟たちは、ズデーテン併合と第二次世界大戦のなかで殺害されるか行方不明になっている。戦時下の軽井沢の疎開者たちと同様に、レーモンドの人生と仕事も戦争に大きく左右されざるを得なかった。

レーモンドはダグウェイでのプロジェクトと同時期に、キャンプ・アプトン、キャンプ・キルマー、ベル・ミード、フォート・ディクス、キャンプ・シャンクス等の軍事施設を建築しており、戦後もアゾレス島、グアム島、ルソン島、釜山、そしてキャンプ座間の米軍総司令部、朝霞のキャンプ・ドレーク米軍総司令部、立川、横田、横須賀、沖縄の基地施設の建設を担当した。建築家や滞在者を共通項にした時、軽井沢と戦争の距離は近い。

（４） プルシアン・ブルーの美と毒[9]

ドレスデンを流れるエルベ川に架かるアウグスト橋に、葛飾北斎（1760-1849）の「神奈川沖浪裏」を模した記念碑がある。2002年８月にドイツ、オーストリア、チェコを襲った洪水を想起

するためのもので、地元のアーティストによって2006年に製作された。しかし北斎とドイツの接点はこれよりずっと古く、作品そのもののなかに見出せる。よく知られるように、「神奈川沖浪裏」をはじめとする北斎作品の多くが18世紀にプロイセンで発明された化学合成顔料「ベロ藍」を用いており、晩年の逗留先だった小布施に北斎が遺した祭屋台天井絵や「八方睨み鳳凰図」にも、この顔料が使われているのである。

紺青を指す「ベロ藍」という呼称はドイツ語の「ベルリンの青 Berliner Blau」から転じたとされ、英語の「プルシアン・ブルー prussian blue」のように、各国語では「プロイセンの青」という表現が一般的である。ベロ藍が初めて製造されたのは1706年頃のベルリン、錬金術師・医者にして急進的敬虔主義思想の唱道者で、ゴシック小説『フランケンシュタイン』の主人公のモデルとも言われるディッペル（Johann Konrad Dippel 1673-1734）の工房においてであった。工房で働いていたスイス出身の染料・顔料製造者ディースバッハ（Johann Jacob Diesbach c.1670-1748）が、カイガラムシから取った赤い色素に骨油の製造過程で生じたアルカリ、そして硫酸鉄を加えたところ、思いもよらず青色が生じた。この美しい青色は、高価で稀少なラピスラズリが原料のウルトラマリンに代わる顔料として、すぐに絵画や陶磁器の彩色に用いられるようになる。

こんにち確認されている限りでは、1709年にファン・デル・ヴェルフ（Pieter van der Werff 1665-1722）が作成してサンスーシ宮殿に飾られた絵画「キリストの埋葬」がベロ藍を使用した最初期の例であり、1710年代半ばにフランスにもたらされ、ヴァトー（Antoine Watteau 1684-1721）、ランクレ（Nicolas Lancret 1690-1743）、パテル（Jean-Baptiste Pater 1695-1736）らが活用した。また、同時期のプロイセンは常備軍の整備を進めている最中で、生産コストが安価なベロ藍は軍服のカラーに採用された。生産量が増大した18世紀後半には、ドイツ各地に11の工場が設立され、ベロ藍製造はプロイセンの無機化学品製造の出発点ともなった。

アジアや日本へのベロ藍の流入については諸説あるが、1759年にスウェーデン東インド会社が中国やインドに輸出し始め、日本では平賀源内（1728-80）が『物類品隲』第一巻（1763年）に「ベレインブラーウ」として紹介したのが初出、伊藤若冲（1716-1800）が『動植綵絵』の「群魚図（鯛）」（1766年頃）に用いたのが使用の始まりとされ、その後は小田野直武（1749-80）ら秋田蘭画の画家たちが用いた。ベロ藍が摺絵に使われるようになったのは1829年頃、北斎の弟子の渓斎英泉（1791-1848）からで、数年後には北斎や歌川広重（1797-1858）がベロ藍を用い始めた。

美術の世界を彩ったベロ藍には、しかしもう一つの歴史がある。1782年、シュトラールズント出身の化学者シェーレ（Carl Wilhelm Scheele 1742-86）がベロ藍からシアン化水素、すなわち青酸を単離する方法を公表した。英語で「プロイセン酸 prussic acid」とも呼ばれる青酸は毒性が高く、19世紀になると害虫駆除、処刑、殺人、自殺に利用されるようになる。第一次世界大戦中、青酸を用いた毒ガス兵器の研究が進められ、戦後に物理化学者ハーバー（Fritz Haber 1868-1934）が殺虫剤ツィクロンBの開発に成功した[10]。周知のように、このツィクロンBが、ナチ

体制下の絶滅収容所での大量殺戮を実現したのであった。

（5） シベリア単騎行の英雄と反ユダヤ主義[11]

明治・大正時代に大衆の人気を集めた軍人、福島安正（1852-1919）は、松本藩の下級武士の家に生まれ、一歳の時に母を失い、父と祖母に育てられた。家が貧しかったために学問をさせてもらえず、心ならずも藩の茶道部屋で働いていたが、藩が主催したオランダ銃の射撃会に出て褒美をもらったのがきっかけとなり、武の道で身を立てる決意を固めた。1865年、父の反対を押して江戸に出て、講武所で兵学を学ぶ。戊辰戦争後も藩費を与えられて江戸で勉学を続け、北門義塾に入り、しばらくして塾務を担当するようになる。校長のドイツ人、「オット・セシル」（生没年不詳）を助け、またセシルからドイツ語を学ぶ。「安正が学問の進歩はセシル氏に負う所多し」とは本人の弁である。その後は翻訳の仕事や家庭教師で糊口を凌いだが、1873年に司法省に出仕、翌年に陸軍省参謀局（後の参謀本部）に移った。

1876年７～10月に西郷従道（1843-1902）に随行してフィラデルフィア万国博覧会に派遣され、1877年には西南戦争に従軍し、翌年から武官に転じて中国、朝鮮、インドを調査、清国公使館での勤務を経て、1887年にベルリン公使館付となる。ベルリン時代はヨーロッパ各国――とくにロシアやバルカン地域――の軍情の調査という本来の任務に加え、田村怡与造（1854-1903）や川上操六（1848-99）、乃木希典（1849-1912）といった日本人将校留学生を監督し、山縣有朋（1838-1922）や児玉源太郎（1852-1906）らの来訪に際して世話をした。

1892年、ベルリンでの駐在期間を終了した福島は、シベリアを単騎で横断して帰国したいと参謀本部に申し出て、承諾された。ロシアの軍備兵勢を調査し、同国のアジア進出の可能性を探ることが目的だったが、あまりにも危険な方法での帰国を選んだのは、本人の並外れた冒険心ゆえではないか。福島は紀元節にあたる２月11日にベルリンを出発、ワルシャワ、リトアニア、ラトヴィア、ペテルブルク、モスクワ、カザン、エカテリンブルク、オムスク、セミパラチンスク（現在のカザフスタンのセメイ）、外蒙古、イルクーツク、チタ、黒河、吉林を経て1893年６月12日にウラジオストクに到着、そこからは船に乗り換えて神戸に上陸し、同月29日に帰京した。怪我や病気、空腹、孤独、極寒と灼熱、現地民との諍い、コレラ流行地の通過、馬の死を経験をしつつ、１万4000キロを488日で踏破した。

このシベリア単騎横断についての福島の回顧は、大阪朝日新聞の記者で「天声人語」の名付け親である西村天囚（1865-1924）によって筆録されている。克明にして血沸き肉躍る冒険譚だが、ユダヤ人への差別的見解が度々登場するのを見逃すことはできない。例えばポーランド地域を通過した際、ロシア政府によって強制的にこの地に追いやられたユダヤ人たちに接した福島は、「猶太人の実境を見るに及んでは其処置を疑ふに足らず」、その理由は「彼らの頭上には戴くべき君主を有せず是を以て忠実の心其中に養ふ所なく卑吝にして理義を解せず浮薄にして廉恥を知らず

唯利を是れ視て営々として糞を嘗め役役として痔を舐り金銭の為には如何なる屈辱をも恥ぢす(ママ)是をもって彼等が居る所は道義壊頽風俗地に堕ち胥ゐて他の良民をさへ傷なひ且つ猶太人の住居街巷の不潔にして衛生を害する決して支那人に譲らずと云ふ宜なるかな」と述べている。さらに福島は、通りがかったユダヤ人に手助けを頼んでも聞き入れてくれなかったのに、銀貨を取り出してみせたら慌てて駆け寄ってきて手伝い始めたとか、馬の餌を求めて四倍の値段をだまし取られたとかいった体験談を加えて、自論を補強する。彼によれば、「金銭をだに見れば恥も義も知らず加之も不潔至極なる猶太人は内地を逐出されて悉く波蘭に集まれり而して尤哀れむべきは波蘭人なり」ということになる。また別の個所で、親切で朴直なロシアの農婦を称賛する際も、「其朴実率直なる彼の猶太人の狡獪とは天地の差あり露西亜の人民が深く猶太人を厭うて国外に逐ひしも亦宜なり」という具合に、福島はユダヤ人の狡猾さを引き合いに出している[12]。帝国軍人のなかでも屈指の事情通だった人物の口から発せられる反ユダヤ主義的言辞は、相当に醜悪な部類に属する。

しかし福島の反ユダヤ主義的言辞に関して注目すべきは、ただその醜悪さのみならず、日本人による反ユダヤ主義の表現としてかなり早い時期に属するという点である。通説では、日本の反ユダヤ主義の浸透は、シベリア出兵に従軍した将兵が偽書『シオン賢者の議定書』を手にしたのがきっかけとされ、その後、安江仙弘（1888-1950）、四王天延孝（1879-1962）、酒井勝軍（1874-1940）といった軍人・軍関係者がその流布に加担したことが知られている。シベリア出兵の四半世紀前に出版された福島の記録がどの程度読まれ、どのように理解され、いかなる影響を及ぼしたのかという問題は、今後の考察に値しよう。

その後の福島は日清戦争や義和団事件、日露戦争で陣頭に立ち、1906年に参謀本部次長、1912年に関東都督に就任した。その間に男爵位も受爵し、また錦絵や軍歌、双六等に描かれて、国民的な英雄となった。1914年に引退してからは帝国在郷軍人会の副会長となり、「剛健主義」を掲げて全国を騎馬旅行しつつ、軍人や青少年を相手に講演活動を行った。郷里にも頻繁に訪れて啓蒙活動を行い、1918年には松本で、長野や新潟、静岡から集まった教員・生徒から成る「剛健旅行団」たちと式典を行っている。ただ、晩年の1915〜17年頃の講演を収めて1919年に出版された講演集にも「陋劣な猶太種の婦人」と題した一話が収録されており、「その眼中利欲の他一点の何物もなく、利欲の為なら恥も外聞も構わぬ心性の下劣さ、人をして漫ろに嘔吐を催させる」、「猶太人と支那人と云えば、拝金宗に於ける世界の代表二人種」と、変わらぬ差別意識を披露している[13]。

松本では、郷土の英雄に対する崇敬の念はその死後も続き、例えば太平洋戦争中の1942年にも、「シンガポール入手全国祝賀の日がくしくも二月十八日、将軍二十三回目の命日となったので、松本市民は、同市西町にある将軍誕生生地碑前に集まつてその功績をつくゞゝとしのんだ」という[14]。今は、この碑は住宅地のなかの、あまり目立たぬ小さな公園に建っている。

（6） ヒトラー・ユーゲントの季節[15]

1922年３月に創設された「国民社会主義ドイツ労働者党青年団」を前身とするヒトラー・ユーゲント（以下、HJ と表記）は、1936年12月１日に10～18歳の全青少年の加入が義務化され、1938年には加入者は700万人にまで膨れ上がった。1938年７～11月、30名の HJ たちが日本を訪問し、全国各地で熱烈な歓迎を受けた。同じ期間に同数の日本の青年もドイツを訪ね、ドイツ国内を周っている。この日独の青少年の相互派遣事業は、1936年11月に日独防共協定が締結された翌月、ナチ党全国青少年指導者のシーラハ（Baldur v. Schirach 1907-74）が駐独大使の武者小路公共（1882-1962）に提案し、両国の関係省庁間の調整を経て実現したものであった。

先に相手国を訪問したのは日本であった。全国から選ばれた様々な職業・学校に属する青年団・少年団員30名は５月３日に日本青年館に招集され、国内での３週間の合宿を経て、５月27日に神戸を出港、マルセイユ、パリ、ケルンを経て７月４日にベルリンに到着した。三ヶ月をかけて、東はティルジット（現在のロシアのソヴィェツク）から西はアーヘンまで、北はフレンスブルクから南はクラーゲンフルトまでを周り、９月６～12日にはニュルンベルクのナチ党大会に参加、シーラハやヘス（Rudolf Heß 1894-1987）に謁見した。彼らは戦闘帽に制服、巻脚絆にリュックという出で立ちだったが、化繊の制服は洗うと縮んでしまう代物であった。参加者は、制服や施設、組織、宣伝活動等を HJ に見習うべきであること、今後は日本でも青少年組織を強力な統制下におく必要があることを認識したという。こうした経験は、従来の青年団組織の解体再編、そして1941年１月の大日本青少年団の結成へと繋がっていく。

HJ が横浜に到着したのは８月16日であった。途中で班別行動をとりつつ、東京、富士山、軽井沢、日光、会津若松[16]、鶴岡、青森、函館、札幌、登別、秋田、岩手県立六原青年道場、松島、仙台、水戸、大島、鎌倉、熱海、名古屋、岐阜、伊勢神宮、奈良、京都、大阪、神戸、高松、瀬戸内、別府、宮崎、霧島、鹿児島、熊本、雲仙、長崎、福岡、下関、宮島、江田島、広島等を訪問し、11月12日に神戸港から出国するまで、首相の近衛文麿や秩父宮（1902-53）といった政治家や著名人との会見、各地の青年団との交流、歓迎会や交歓会、講演、座談会、史跡や景勝地の見学、寺社参拝、展覧会や相撲の観覧、映画鑑賞、日本青年団員との富士登山、キャンプ、親善試合等々、過密なスケジュールをこなした。当時の新聞にはさらに、由比ガ浜で身投げした女性を HJ 団員が救出した話や、河口湖畔の富士ビュー・ホテルでヴィルヘルム二世（Wilhelm II. 1859-1941）の孫ルイ・フェルディナント（Louis Ferdinand v. Preußen 1907-94）夫妻と偶然に出くわした話等も掲載されており、実に盛り沢山の旅程だったことが分かる[17]。

HJ の訪問先や停車駅はハーケンクロイツ旗や日の丸を振る観衆があふれ、多数の関連図書が出版され、新聞は連日の報道を続けた。また、北原白秋（1885-1942）の作詞、高階哲夫（1886-1945）の作曲で、藤原義江（1898-1976）が歌う「万歳ヒットラーユーゲント―独逸青少年団歓迎の歌」のレコードが日本ビクターから発売された。その歌詞は以下のようなものである。「燦たり輝く

ハーケン・クロイツ／ようこそ遥々西なる盟友／いざ今見えん朝日に迎えて／我等ぞ東亜の青年日本／万歳ヒットラー・ユーゲント万歳ナチス／聴け我が歓呼をハーケン・クロイツ／響けよその旗この風この夏／防共一度君我誓わば／正大為すあり世紀の進展／万歳ヒットラー・ユーゲント万歳ナチス／燦たり輝くハーケン・クロイツ／勤労報国また我が精神／いざ今極めよ大和の山河を／卿等ぞ栄えあるゲルマン民族／万歳ヒットラー・ユーゲント万歳ナチス」。なお、この歌は「国民歌謡」として二週間にわたりラジオ放送されたが、その際に合唱指導者がドイツ語の原音を意識して、「ハーケンクロ（イツ）」、「ヒ（ッ）トラーユーウーゲン」と発音を変えたため、白秋は『東京朝日新聞』紙上で二日にわたって怒りを吐露している[18]。

HJ の来日を批判的に見ていた者もいる。HJ は軽井沢では近衛の別荘に招かれ、また林房雄（1903-75）、川端康成（1899-1972）、室生犀星（1889-1962）の訪問を受け、佐々木信綱（1872-1963）からは和歌三首を贈られた。しかし、この時に同地に滞在中だった東北帝大教授のレーヴィット（Karl Löwith 1897-1973）は、日本人の大多数の熱狂とは正反対の感想を残している。ドイツを逃れてきたユダヤ人哲学者の目には、別荘地を闊歩する制服姿の少年たちの姿は不快だったであろう。

HJ 帰国から間もない1938年11月25日、両国は日独防共協定締結二周年に絡めて「文化的協力ニ関スル日本国独逸国間協定」を結ぶ。この協定は日独文化連絡協議会の設置、関連する文化施設の充実、留学生や教員の相互交流、在独日本学校と在日ドイツ学校への好意的対応、出版物や芸術作品の交換、映画事業やラジオ放送における協力、スポーツ交流の促進を目的としたものであり、日独間の「文化の枢軸同盟」（清水雅大）の基盤となる。

1940～41年にもう一度、今度は日本側からの提案によって、日独の相互派遣が行われている。しかしヨーロッパで戦争が始まっていたこの時、派遣された青少年は日独各６名、ドイツ側の日本滞在は２ヶ月間に過ぎなかった。HJ は1940年10月３日にベルリンを出発、シベリア鉄道で東行し、満洲や朝鮮も視察し、11月10日に宮城前広場で開催された紀元二千六百年式典に参列した。日本からの派遣団は予定よりも４ヶ月遅れて1941年２月に出発し、ドイツ国内のみならず占領下のフランスや旧ポーランド領、旧チェコ領も見学し、ワルシャワではユダヤ人ゲットーも目にしている。シベリア鉄道を使って帰国し、東京に着いたのは独ソ戦勃発の前日、６月21日である。同月、日独の青少年団交歓事業は終了する。交歓事業の終わりは、いよいよ多くの日独青少年が戦火に散る時期の始まりでもあった。

（７） 志賀重昂のドイツ体験[19]

1913年２月、地理学者の志賀重昂（1863-1927）は加茂農林学校での講演の前後に木曽川を船で渡った。同行者によれば、両岸の風景に見惚れていたという。７月に再訪し、「木曽川川岸、犬山は全くライン（莱因河）の風景其儘なり」と評したのが、「日本ライン」という呼称の始ま

りとされる。講演録や短文を集めた『世界の奇観』でも、志賀は犬山城付近の木曽川の情景を「朝々暮々此処を上下する舟人をしてすら楫を停めて坐ろに恍惚たらしむ、誠に是れ一幅ラインの縮図」と讃えている[20]。もっとも、長野の大町をインターラーケンに、仁科三湖をスイスに、大垣から愛知県西部にかけてをオランダに、鹿児島をイタリアという具合に、訪ねた土地を外国に例えるのは志賀の常で、その手の美辞に節操や思慮はあまり感じられない。

岡崎藩の藩校教師の子に生まれた志賀は、上京して攻玉社や大学予備門に通い、1884年に札幌農学校を卒業した。同年に長野県中学校長野本校（現在の県立長野高校）の教員になるが、県知事と対立して間もなく退職、上京して丸善書店に就職し、辞書の校正係の職に就いた。1885年11月、22歳の志賀は海軍兵学校の練習艦「筑波」に乗せてもらう機会を得て、イギリス軍の巨文島占領によって緊張する対馬や下関を視察した。翌年の２月９日、再び筑波に便乗して品川を出発、カロリン諸島のクサイ（コスラエ）島、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、サモア、ハワイを周って、11月21日に帰国した。この地域への日本の進出は、1890年に経済学者・実業家の田口卯吉（1855-1905）が南島商会を設立して商業活動に乗り出したのが皮切りで、1883年にはマーシャル諸島のラエ島で日本人漂流民が現地民に殺害される事件が起き、その調査や対応のために1884～85年に視察団が派遣されている[21]。1886年の志賀の航海は、日本社会が南洋を意識し始めた時代の、最初期の試みだった。

志賀が航海中に書いた「南洋巡航日記」は福沢諭吉（1835-1901）の『時事新報』に６回に分けて載り、さらに帰国後すぐに同紙に「南洋巡航紀聞」が連載された。これを抜粋、加筆して1887年４月に出版された『南洋時事』は版を重ね、その度に増補、訂正が行われた。本稿の関心からしてこの著作が興味深いのは、志賀が来航した地域がこの時期にドイツ帝国の植民地に組み込まれつつあったこと、そして、当時の知識人青年の常道から外れ、西洋ではなく南洋に赴いた志賀が、ドイツの南洋植民地の形成過程を実体験した数少ない人物だったということである。

『南洋時事』には随所に「日耳曼」、「独逸」が登場する。志賀によれば、「近時南洋ノ拓地殖民政略ニ尤モ鋭意ナルモノハ、日耳曼ニシテ其行事活発激烈ナル、時ニ人ヲシテ後ニ瞠若タラシムルモノアリ」という状況であった[22]。その矛先はとくにサモアで、ここではドイツの「通商殖産会社」が大量のインド人労働者を使役しており、志賀の来訪直前には、ドイツ帝国領事ヴェーバー（Theodor Weber 1844-89）が軍事力を用いて国王を追放しようと画策し、英米の介入を招いていた。志賀は、サモア群島ウボル島のアビヤ港に到着した際に急に眠気に襲われ、気づくと傍に「〈タンガロア〉の神霊」、すなわち「〈サモア〉ノ国神」が立っており、「予ハ毎ニ独逸人ガ其強大ヲ恃ンデ予ガ本国ヲ遇スルノ方甚ダ宜シキヲ得ザルヲ憤フルモノナリ」と慨嘆したといった、夢幻能風の夢語りを挿入している[23]。さらに彼は初版の最後に、出版の一ヶ月前に発行されたイギリスの新聞から得た情報として、ヴェーバーがその後もサモア政庁の屋上にドイツ帝国旗を立てようとしていると記している。

志賀のこうした危惧が杞憂だったとは、決して言えない。ドイツの南洋進出は1884年のビスマルク諸島、カイザー・ヴィルヘルムスラント（現在のパプアニューギニア北部）の獲得から始まり、1885年のマーシャル諸島（独領ミクロネシア）とソロモン諸島北部、1888年のナウル、1899年のマリアナ諸島、パラオ諸島、カロリン諸島、西サモアの植民地化と、着実に展開した。これらの地域ではドイツの統治下で芋類の栽培、ココヤシの植樹、家畜の導入が拡大し、ボーキサイトや燐鉱石の採掘が進み、さらに1906年にはドイツ・オランダ電信会社によってヤップ島、グアム、スラウェシ島のマナドを繋ぐ海底電線が敷設され、上海にも延伸されている。こうしたことをあらためて確認すると、本国から遠く離れていたこと、移住者が少なかったこと、統治期間が短期であったことをもって、ドイツの南洋統治の意味を過小評価すべきではないだろう。

志賀の南洋への関心は、第一次世界大戦中に日本軍とオーストラリア軍の攻撃によってドイツ植民地が消滅した後も続いており、例えば1918年４月に雑誌『日本一』に発表した「南洋占領諸島の処理」では、「絶海豆大の島嶼」は「海洋開拓の足場」であり、ここに民族自決の原則が適用される前に、日本語教育、荘厳な官庁の建設、現地住民の負担軽減を実行すべきだと主張している(24)。同時期に行った日本ラインの命名が無邪気である分、志賀の南洋への執着はなおさら真剣に感じられ、そしてドイツとの最初の接触が彼に与えた影響の大きさが窺える。

Ⅲ．おわりに

本稿が対象としたいわゆる東山地方は、東北地方や日本海側地域等と同様に、国際交流の面で、近代以降に太平洋側の大都市部の後塵を拝したイメージが強い。しかし実際には、地場産業に対するグローバル化の影響、外国人避暑地の発展、文化交流、ドイツに縁のある人物が輩出した事例等、ドイツ史とのかかわりを様々な視点から論じることができる。

また、近年に顕彰と検証が進んでいる杉原千畝（1900-86）、1901～02年にドイツ公演を行った川上音二郎（1864-1911）と貞奴（1871-1946）、ドイツ系商社のイリス商会に勤務し、後にクルップ社をモデルとする鐘紡共済組合を設立した実業家の武藤山治（1867-1934）、1930年に来日してブームを起こしたスキーヤー、シュナイダー（Hannes Schneider 1890-1955）のこと等、紙幅の都合から取り上げることのできなかったテーマも少なくない。それらについての論究は他日を期したい。

注

（１） 小原淳「北海道に存するドイツ関連史跡の総合的検討―日独関係史の再検討に向けて」『WASEDA RILAS JOURNAL』８、2020年；同「東北地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』66、2021年；同「関東北部に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学高等研究所紀要』13、2021年；同「関東南部に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『西洋史論叢』42、2021年；同「東海地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『史観』185、2021年；同「北陸地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討」

『WASEDA RILAS JOURNAL』９、2021年。

（２） 雨宮敬次郎、桜内幸雄編・出版『過去六十年事績』、1907年；服部春彦「19世紀フランス絹工業の発達と世界市場」『史林』54-3、1971年；石井孝『横浜売込商甲州屋文書』有隣堂、1984年；井川克彦「明治四年の蚕種輸出」『開港のひろば』12、1985年８月；湯浅隆「日本産蚕種輸出の前提条件―フランス養蚕地帯のありかたから」『国立歴史民俗博物館研究報告』16、1988年；湯浅隆「幕末期に輸出された日本産蚕種の動向―フランス養蚕地帯における受容過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』21、1989年；松原建彦『フランス近代絹工業史論』晃洋書房、2003年；増田廣實「横浜開港初期における内陸との通信と運輸―甲州屋を事例にして」『生駒経済論叢』7-1、2009年；ジャン＝アンリ・ファーブル／奥本大三郎訳『完訳ファーブル昆虫記』第９巻下、集英社、2015年；吉田律人「〈兵隊山〉の誕生―太田陣屋と横浜大隊区司令部」『開港のひろば』144、2019年４月；Patrick Berche, Louis Pasteur. From Crystals of Life to Vaccination, in: *Clinical Microbiology and Infection*, 18-5, 2012; Tobias Arand, *1870/71. Der Deutsch-Französische Krieg erzählt in Einzelschicksalen*, Hamburg 2018.

（３） *Hansard 1803-2005*, Address to Her Majesty on Her Most Gracious Speech. HC Deb 09 February 1871, vol. 204, cc53-116（http://hansard.millbanksystems.com/commons/1871/feb/09/address-to-her-majesty-on-her-most）（2021年９月13日最終閲覧）.

（４） 雨宮敬次郎、桜内幸雄編・出版『過去六十年事績』、71頁。

（５） カール・ハム編／生熊文訳・解題「ハインリヒ・ハムの日記から」『習志野市史研究』３、2003年；仲田道弘『日本ワイン誕生考―知られざる明治期ワイン造りの全貌』山梨日日新聞社、2018年；仲田道弘『日本ワインの夜明け―葡萄酒造りを拓く』創森社、2020年；森孝晴「日本ワインのルーツに長沢鼎がいる可能性について」『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』17、2020年；Jancis Robinso, Julia Harding（ed.）, *The Oxford Companion to Wine*, 4th ed., Oxford 2015.

（６） 小原淳「関東南部」Ⅱ(2)を参照。

（７） 若松コロニーについては、小原淳「北陸」Ⅱ(1)を参照。

（８） アントニン・レーモンド、三沢浩訳『私と日本建築』鹿島出版会、1977年；荒井訓「終戦前滞日ドイツ人の体験」(1)～(5)『早稲田大学・文化論集』15～17・20・21、1999年９月～2002年９月；アントニン・レーモンド、三沢浩訳『自伝アントニン・レーモンド』2007年；三沢浩『アントニン・レーモンドの建築』鹿島出版会、2007年；大堀聰『心の糧―戦時下の軽井沢 Wartime Karuizawa』銀河書籍、2020年；高川邦子『アウトサイダーたちの太平洋戦争―知られざる戦時下軽井沢の外国人』芙蓉書房出版、2021年；Lynn Eden, *Whole World on Fire: Organizations, Knowledge, and Nuclear Weapons Devastation*, Ithaca, N.Y. 2004; Dylan Plung, The Japanese Village at Dugway Proving Ground: An Unexamined Context to the Firebombing of Japan, in: *Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, 16-8, 2018.

（９） 神戸市立博物館編『特別展　西洋の青―プルシアンブルーをめぐって』2007年；『神戸市立博物館研究紀要』24、2008年；竹内隆「小布施の祭り屋台と葛飾北斎史料」『財団法人北斎館北斎研究所研究紀要』１、2008年；金田功子「葛飾北斎と信州小布施―史資料からの解明」(1)～(3)『財団法人北斎館北斎研究所研究紀要』１～３、2008～2010年；赤城沙紀・阿部善也・和泉亜理沙・平山愛里・村串まどか・中井泉・下山進「可搬型紫外可視吸収／蛍光分光分析装置の開発及び葛飾北斎肉筆画の非破壊オンサイト分析への応用」『分析化学』68-7、2019年；Stephan Goldschmidt, *Johann Konrad Dippel 1673-1734: Seine radikalpietistische Theologie und ihre Entstehung*, Göttingen 2001; Jens Bartoll, *The Early Use of Prussian Blue in Paintings*, paper of 9th International Conference on NDT of Art, Jerusalem Israel, 25-30 May 2008; Holger Andreas, „Cyan-Industrie“: Anfänge einer Chemischen Industrie in Deutschland im 18. Jahrhundert, in: *Mitteilungen, Gesellschaft Deutscher Chemiker / Fachgruppe Geschichte der Chemie*, 25, 2017; Alexander Kraft, *Berliner Blau. Vom frühneuzeitlichen Pigment zum modernen High-Tech-Material*, Diepholz/Berlin 2019.

（10） ハーバーと日本の関係については、小原淳「北海道」Ⅱ(3)を参照。

(11)　西村天囚編『単騎遠征録』金川書店、1893年；福島安正述、野中春洋編『伯林より東京へ―単騎遠征』小西書店、1918年；『福島大将講演・剛健主義（帝国在郷軍人会本部蔵版）』小林川流堂、1919年；前沢淵月『山ざくら―信州の人々』法学書院、1942年；原山煌「福島安正の言説―シベリア単騎横断旅行以後の大衆向け活動について」『桃山学院大学総合研究所紀要』31-3、2006年；鈴木康史『冒険と探検の近代日本―物語・メディア・再生産』せりか書房、2019年；澤田次郎「福島安正〈慶応元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴〉」『拓殖大学論集　人文・自然・人間科学研究』44、2020年；澤田次郎「福島安正のユーラシア大陸旅行―1880年代から90年代を中心として」『拓殖大学国際日本文化研究』４、2021年。

(12)　西村天囚編『単騎遠征録』25～26頁、47頁。

(13)　『福島大将講演・剛健主義』93～95頁。

(14)　前沢淵月『山ざくら』226、227頁。

(15)　日独青少年団交歓会編・出版『日独青少年団交歓記念』、1939年；カール・レーヴィット、秋間実訳『ナチズムと私の生活』法政大学出版局、1990年；中道寿一『ヒトラー・ユーゲントがやってきた』南窓社、1991年；大串隆吉「戦時体制下日本青年団の国際連携―ヒトラー・ユーゲントと朝鮮連合青年団の間」（1）『東京都立大学人文学報』270、1996年；佐藤卓己「ヒトラー・ユーゲントの来日イベント」（津金澤聡廣・有山輝雄編『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社、1998年所収）；中道寿一『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？―規律と熱狂、あるいはメカニカルな美』南窓社、1999年；中道寿一「ヒトラー・ユーゲントと日本」（工藤章・田嶋信雄編『日独関係史－1890～1945』第３巻、東京大学出版会、2008年所収）；清水雅大『文化の枢軸―戦前日本の文化外交とナチ・ドイツ』九州大学出版会、2018年；Hans-Joachim Bieber, *SS und Samurai: deutsch-japanische Kulturbeziehungen 1933-1945*, München 2014.

(16)　８月31日に白虎隊の墓を参拝している。小原淳「東北」Ⅱ（11）を参照。

(17)　『東京朝日新聞』1938年９月26日朝刊、1938年８月23日夕刊。

(18)　北原白秋「H・J 歓迎歌について」（上・下）『東京朝日新聞』1938年９月21日朝刊、22日朝刊。

(19)　志賀重昂『南洋時事』丸善商社書店、1887年；林原純生「『南洋時事』から『日本風景論』へ―初期志賀重昂における〈文学〉」『日本文学』44-1、1995年；亀井秀雄「『南時事』研究」（北海道大学百二十五年史編集室『北大百二十五年史　論文・資料編』、2003年所収）；可児光生「日本ライン下りの歴史」『美濃加茂市民ミュージアム紀要』10、2011年；丹野勲「戦前日本企業の南洋群島進出の歴史と戦略―南洋興発、南洋拓殖、南洋貿易を中心として」『神奈川大学国際経営論集』49、2015年；荻原隆『日本における保守主義はいかにして可能か―志賀重昂を例に』晃洋書房、2016年；春名展生「国粋主義者の誕生―志賀重昂の思想形成に関する一考察」『東京外国語大学・国際日本学研究』１、2021年；John Moses, Paul Kennedy, *Germany in the Pacific and Far East 1870-1914*, St Lucia 1977; Stewart Firth, *New Guinea under the Germans*, Melbourne 1983; Hermann J. Hiery, *Das Deutsche Reich in der Südsee 1900-1921: Eine Annäherung an die Erfahrungen verschiedener Kulturen*, Göttingen/Zürich 1995; Masako Gavin, *Shiga Shigetaka 1863-1927: The Forgotten Enlightener*, Richmond 2001.

(20)　志賀重昂全集刊行会編・出版『志賀重昂全集』第５巻、388～390頁。

(21)　「邦人遭害事実取調ノタメ南洋〈マルシャル〉群島視察ノ件」『日本外交文書』第18巻（明治18年／1885年）。

(22)　志賀重昂『南洋時事』（初版）28頁。

(23)　同上、135頁。

(24)　『志賀重昂全集』第３巻、264頁。

東山地方に存する日独関係の史跡一覧

史跡名	住所	備考
山梨中銀金融資料館	山梨県甲府市中央2-11-12	Ⅱ(1)に関連。
山梨近代人物館	山梨県甲府市丸の内1-6-1	Ⅱ(1)に関連。
隆巌院	山梨県南アルプス市在家塚1819	Ⅱ(1)に関連。境内に若尾逸平の銅像。
長禅安国寺	山梨県甲府市愛宕町	Ⅱ(1)に関連。若尾家の墓所。
雨敬翁顕彰碑	山梨県甲州市塩山下萩原	Ⅱ(1)に関連。近隣に雨敬橋、雨敬園。
万力公園	山梨県山梨市万力	Ⅱ(1)に関連。根津嘉一郎(1860-1940)の銅像。
根津記念館	山梨県山梨市正徳寺296	Ⅱ(1)に関連。
総持寺	神奈川県横浜市鶴見区鶴見2-1-1	Ⅱ(1)に関連。雨宮の顕彰碑。
雨宮記念館	長野県北佐久郡軽井沢町長倉2466-3	Ⅱ(1)に関連。離山公園(旧雨宮敬次郎邸)
荒船・東谷風穴蚕種貯蔵所跡	群馬県甘楽郡下仁田町南野牧屋敷甲10690	Ⅱ(1)に関連。世界遺産。
サントリー登美の丘ワイナリー	山梨県甲斐市大垈2786	Ⅱ(2)に関連。
シャトー・メルシャン・ワイン資料館	山梨県甲州市勝沼町下岩崎1106-1	Ⅱ(2)に関連。近隣にぶどうの国文化館（下岩崎1034-1)、宮光園（下岩崎1741)、龍憲セラー(下岩崎1856)、旧田中銀行博物館（勝沼3130-1)、ルミエール旧地下発酵槽（一宮町南野呂624)、トンネルワインカーヴ（深沢3602-1)。
播州葡萄園跡	兵庫県加古郡稲美町印南	Ⅱ(2)に関連。1880～96年に操業した国営のブドウ園・ワイナリー。近隣に播州葡萄園歴史の館（国安1286-55)。
牛久シャトー	茨城県牛久市中央3-20-1	Ⅱ(2)に関連。重文。1903年に神谷伝兵衛(1856-1922）が「牛久醸造場」創業。近隣に神谷の墓所、神谷稲荷神社（神谷2)。
岩の原葡萄園	新潟県上越市北方1223	Ⅱ(2)に関連。川上善兵衛記念館を併設。
軽井沢聖パウロカトリック教会	長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢旧軽井沢179	Ⅱ(3)に関連。
軽井沢タリアセン	長野県北佐久郡軽井沢町長倉塩沢217	Ⅱ(3)に関連。ペイネ美術館はレーモンドの「夏の家」。
軽井沢の新スタジオ	長野県北佐久郡軽井沢町長倉21	Ⅱ(3)に関連。
旧近衛文麿別荘(市村記念館)	長野県北佐久郡軽井沢町長倉2112イ21	Ⅱ(3)に関連。
軽井沢高原文庫	長野県北佐久郡軽井沢町長倉塩沢217	Ⅱ(3)に関連。
レーモンド設計事務所メモリアルルーム・ギャラリー	東京都渋谷区代々木5-58-1	Ⅱ(3)に関連。
ジョージ・ナカシマ記念館	香川県高松市牟礼町大町1132-1	Ⅱ(3)に関連。
北斎館	長野県上高井郡小布施町小布施485	Ⅱ(4)に関連。
岩松院	長野県上高井郡小布施町雁田615	Ⅱ(4)に関連。「八方睨み鳳凰図」を所有。

高井鴻山記念館	長野県上高井郡小布施町小布施805-1	Ⅱ(4)に関連。高井鴻山(1806-83)は北斎の門弟。北斎を小布施に招いた。
祥雲寺	長野県上高井郡小布施町小布施947	Ⅱ(4)に関連。鴻山の漢詩碑。
すみだ北斎美術館	東京都墨田区亀沢2-7-2	Ⅱ(4)に関連。周辺に生地跡や居住地等。
「福島大将誕生地」碑	長野県松本市開智3-2	Ⅱ(5)に関連。
関鍛冶伝承館	岐阜県関市南春日町9-1	Ⅱ(6)に関連。来訪したHJに贈呈された短刀、日独防共協定締結の際にヒトラーに送った日本刀の返礼品である西洋兜、日独伊三国同盟締結の際にムッソリーニに送った日本刀の返礼品である陶器皿を所蔵。
岐阜県刃物会館	岐阜県関市平和通4-12-6	Ⅱ(6)に関連。
フェザーミュージアム	岐阜県関市日ノ出町1-17	Ⅱ(6)に関連。
白秋生家・白秋資料館	福岡県柳川市沖端町55-1	Ⅱ(6)に関連。
祐泉寺	岐阜県美濃加茂市太田本町2-3-14	Ⅱ(7)に関連。隣地の太田稲荷に志賀の墓碑。境内に北原白秋、坪内逍遥（1859-1935）、松尾芭蕉（1644-94）の歌碑・句碑。
不老公園	愛知県犬山市継鹿尾川端	Ⅱ(7)に関連。園内に志賀の碑。
岡崎市東公園	愛知県岡崎市欠町小山田	Ⅱ(7)に関連。園内に志賀の銅像、伊東忠太（1867-1954）設計の墓所、志賀の発願で建立された世尊寺、東京の志賀邸から移築された南北亭、「三河男児」歌碑。さらに本多光太郎資料館、旧本多忠次邸等。
富士ビューホテル	山梨県南都留郡富士河口湖町勝山511	第二次世界大戦中にドイツ大使館が疎開。1945年、同地でマイジンガー（Josef Meisinger 1899-1947）が逮捕された。
富士山	静岡県富士宮市北山	多数のドイツ人が登頂。リヒトホーフェン（Ferdinand v. Richthofen 1833-1905）、シュタイニッツァー（Wilhelm Steinitzer 1867-1954）、ナウマン（Edmund Naumann 1854-1927）、ライン（Johannes J. Rein 1853-1918）等が記録。
黒姫童話館	長野県上水内郡信濃町野尻3807-30	エンデ（Michael Ende 1929-95）の資料を多数所蔵。
高島公園	長野県諏訪市高島1-20	永田鉄山中将像。永田（1884-1935）はドイツやスイスに駐在経験があり、1921年のバーデン・バーデンの密約に関与。
片倉館	長野県諏訪市湖岸通り4-1-9	重文。カールスバート（現在はチェコのカルロヴィ・ヴァリ）を参考にしたとされる。
旧制高等学校記念館	長野県松本市県3-1-1	校舎は重文。ツァヘルト、ヤンゼン、望月市恵（1901-91）らが教えた。北杜夫（1927-2011）の『どくとるマンボウ青春記』の舞台。
シュナイダー記念塔	長野県上田市菅平高原	県内のシュナイダー広場（下高井郡野沢温泉村豊郷9778）に岡本太郎（1911-96）作のシュナイダー像等。

進徳の森	長野県伊那市高遠町東高遠	林学者の中村弥六（1855-1929）が郷里に植林。中村は最初期のミュンヘン大学留学生。高遠町図書館（西高遠810）が関連史料を所蔵。近隣に藩校進徳館（東高遠2007）。
上田市立博物館	長野県上田市二の丸3-3	山極勝三郎記念室と記念碑と胸像。山極（1863-1930）はコッホ（Robert Koch 1843-1910）、フィルヒョウ（Rudolf Virchow 1821-1902）に師事。近隣に生誕地（中央西1-5）、東京都に住居跡（文京区西片2-5-14）。
飯田市並木通りの田中芳男・義廉顕彰碑と田中ビワ	長野県飯田市追手町2-655-7	博物学者の田中芳男（1838-1916）はウィーン万博（1873）に派遣される。『独逸農事図解』の資料を収集。飯田市美術博物館（追手町2-655-7）に胸像。
人道の丘公園	岐阜県加茂郡八百津町八百津1071	杉原千畝記念館。人道の港敦賀ムゼウム（福井県敦賀市金ケ崎町23-1）にも関連の展示がある。
教泉寺	岐阜県美濃市東市場町2625-1-1	「杉原千畝生誕地」の案内板。
「杉原千畝実家跡」の案内板	岐阜県加茂郡八百津町八百津3781	他に杉原千畝広場センポ・スギハラ・メモリアル（愛知県名古屋市瑞穂区北原町2）、杉原千畝の少年像（愛知県名古屋市瑞穂区高田町3-28-28名古屋市立瑞穂ヶ丘中学）、杉原千畝夫妻顕彰碑（静岡県沼津市本千本　港口公園）、杉原千畝顕彰碑（東京都新宿区戸塚町1-104早稲田大学早稲田キャンパス14号館脇）。
貞照寺	岐阜県各務原市鵜沼宝積寺町5-189	Ⅱ(6)に関連。川上貞奴が建立。貞奴縁起館を併設。近隣の萬松園（宝積寺町3-82-2）は貞奴の旧別荘、重文。他に文化のみち二葉館（愛知県名古屋市東区橦木町3-23）、高砂緑地松籟荘の碑（神奈川県茅ヶ崎市東海岸北1-4-6-50）、「電力王福沢桃介翁像・川上貞奴女史碑」（岐阜県恵那市大井町）、賤母発電所（岐阜県中津川市山口）、南向ダムと福澤桃介胸像（長野県駒ヶ根市中沢吉瀬）、大桑発電所と須原木曽川堤防沿いハナモモ並木（長野県木曽郡大桑村野尻）、桃介橋河川公園と福沢桃介記念館と読書発電所（重文）（長野県木曽郡南木曽町読書）。
恵那峡	岐阜県恵那市大井町	志賀重昂が命名。
武藤山治像	岐阜県海津市平田町仏師川488　生涯学習センター内　海津市平田図書館	他に国民会館の武藤山治記念室（大阪府大阪市中央区大手前2-1-2）、旧武藤山治邸（兵庫県神戸市垂水区東舞子町4-2051）。
白川郷	岐阜県大野郡白川村荻町	タウトが1935年に訪問。

本稿は、2018-22年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「1848～1871年のドイツ系革命家たちの活動とネットワークに関する研究」（課題番号18K01050）の成果の一部である。